あがりやすい性格特性と親の養育態度について

The relationship between the nurture manner and the stage fright

1K04B094-8

斉藤 洋介

指導教員

主査 正木宏明先生

副査 作野誠一先生

目的

同じ環境で同じだけ練習していても、どうしてあがりを感じやすい者と、そうでない者が存在するのだろうか。という疑問に着目し、アイゼンクのパーソナリティ理論を根拠に、あがりやすい者が実際に内向的な性格特性をもっているのかを検証することを第一の目的とした。またそこに関連性が生じると仮定して、この内向的な性格特性を持つものが青年期までにどのような親子関係を両親との間に形成していたかを調査することによって、あがりやすい性格と親の養育態度との関係を明らかにすることを第二の目的とした。

方法

1 対象

中学・高校で運動部に所属していた早稲田大学学生男女 41名を対象に行った。

2 調査内容

- 1) 「スポーツにおけるあがり調査票」を用いた。回答者には普段、競技場において自覚している“現在の”自分について回答してもらった。
- 2) モーズレイ性格検査(H. J. アイゼンク著)を使用し、外向性一内向性傾向、神経症傾向(神経質一安定)の2尺度を測定した。
- 3) FDT親子関係診断検査(東洋・柏木恵子・繁多進・唐澤眞弓著)の子ども用(中学・高校用)を使用した。なお、現時点での親子関係ではなく、中学・高校までの親子関係を思い出し回答してもらった。

結果

親子関係検査の各因子と、あがり得点について、被拒絶感因子($r=.548, p<.01$)、積極的回避因子($r=.414, p<.01$)との間に、正の相関があった。また心理的侵入因子($r=.316, p<.05$)との間に、正の相関があった。情緒的接近因子($r=-.315, p<.05$)との間に、負の相関があった。それ以外の因子については相関関係は認められなかった。

親子関係検査の各因子と、向性得点について、被拒絶感因子($r=-.364, p<.05$)との間に、負の相関があった。それ以外の因子については、相関関係は認められなかった。

親子関係検査の各因子と、神経症傾向得点につ

いて、被拒絶感因子($r=.433, p<.01$)、積極的回避因子($r=.412, p<.01$)との間に、正の相関があった。また被受容感因子($r=-.458, p<.01$)、情緒的接近因子($r=-.476, p<.01$)との間に、負の相関があった。それ以外の因子については、相関関係は認められなかった。

考察

父親との間に、被拒絶感や積極的回避、心理的侵入などのネガティブな親子関係を親との間に結んでいるほど、その子どもの性格は内向的、もしくは神経症的傾向を示す傾向があると考えられる。逆に被受容感や情緒的接近で、ポジティブな愛着を親に対して感じる事ができれば、子どもの性格は外向的になりやすいことが予想される。このことから子どもから見た親との関係性で「被拒絶感」「積極的回避」「心理的侵入」で高得点の場合に、その親に先行研究から得られた、あがりやすい子どもを育てがちな養育態度を見ることができよう。その態度は①支配的②かまひすぎ③無視④拒否⑤残酷のいずれかに当てはまるのではないか。これら5パターンで育てられた子どもは内向的、もしくは神経症傾向の高い傾向があり、同時にあがりやすい傾向を持つとも言えるだろう。

表3 父親の相関関係

	あがり得点	向性得点	神経症傾向得点
被拒絶感	0.548**	-0.364*	0.433**
積極的回避	0.414**	-0.266	0.412**
心理的侵入	0.316*	-0.122	0.066
厳しいしつけ	0.293	-0.039	0.129
両親間不一致	0.085	0.01	0.01
達成要求	0.264	-0.080	-0.041
被受容感	-0.232	0.258	-0.458**
情緒的接近	-0.315*	0.277	-0.476**

* $p<.05$ ** $p<.01$